

# ルーセラン・ミッショントスクール九州学院のルーツ

藤本 誠

## — 創設者C.L.ブラウンの キリスト教主義学校構想 —

創設者ブラウンは、九州学院が設立認可される前年の一九〇九(明治四二)年一一月、『Japan for Christ』をミッションボードの支出により五〇〇〇部出版した。出版されたのはブラウンが既に再来日し、熊本市大江に九州学院の敷地を購入するため最後の手続きをしていた頃である。この『Japan for Christ』はブラウンが日本の紹介とジャパン・ミッションについて幅広い理解をしてもらうために、南部一致シノッドへの日本報告書として出版したものである。出版される前年の一九〇八(明治四二)年一二月一〇日、バージニア州シャーロットで開かれたボード会議で、佐賀幼稚園の建物支援一、〇〇〇ドル、熊本の宣教師館と博多



『JAPAN FOR CHRIST』表紙

教会礼拝堂に一、二一〇〇ドルの支出が決定されたのと同時に、この本の出版費用の支出も決定されていた。日の丸の国旗と旭日旗が交差した表紙には、「JAPAN FOR CHRIST」のタイトルと「四月日本為」、「日本基督為」が記されている。目次の次の扉には「マタイによる福音書」第二二八章一九、二〇節の聖句が掲げられ、ブラウンの序文が続いている。四

頁に台湾を含む日本国 地図、本文が始まる五頁は『TIDINGS』<sup>(注1)</sup>の一九〇七年

一月号に掲載されていた「熊本教会の郊外日曜学校」の写真が冒頭を飾っている。その写真に「Japan for Christ」のタイトルが載せてあるから、ブラウンお気に入りの写真だったのであろう。

この著書の第四章「日本伝道の好機 (OPPORTUNITY FOR MISSION WORK IN JAPAN.)」の「VI. キリスト教教育 (CHRISTIAN EDUCATION.)」で、ブラウンは自身のキリスト教教育観を開拓している。ブラウンのキリスト教主義学校（九州学院）構想を理解する上で重要なので拙訳出転載する。

「日本政府は教育の最も完成されたシステムを構築している。しかし、教育の部門化の傾向は、完全にこの教育システムを世俗化（非宗教

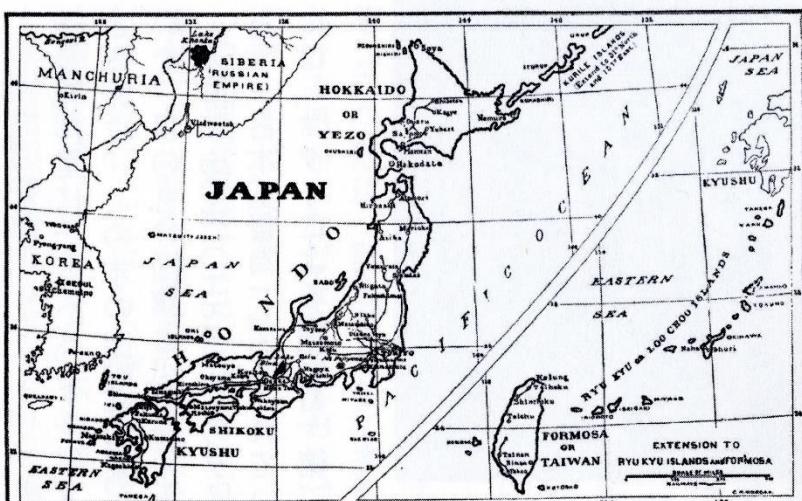
**Japan for Christ**  
By REV. CHARLES L. BROWN, D. D.

**OUR CHURCH POLICY.**

- I It is the mission of The Whole Church to give the gospel to The Whole World.
- II This entire Church being A Missionary Society, each member of The Body is under covenant to help fulfill the will of The Head: to give the gospel to every creature.
- III Every Christian is commanded to Go; if not in person, then potentially having a share by gift and prayer in supporting A Parish Abroad, as well as The Parish at Home.
- IV Our Giving should be an Act of Worship. (Prov. m. 9) Cheerful (1 Cor. x. 1) and according to the Rule of Three (1 Cor. xvi. 2).  
Individually Let every one of you Lay by him in store on the Systematically First day of the week.  
Proportionately As God hath prospered him.

PRICE: TWENTY-FIVE CENTS, POSTPAID  
Lutheran Board of Publication  
Columbus, O. G.

## 目次



地図

化) するこ  
とになる。  
その政策は  
宗教から教  
育を分離す  
ることにつ  
ながる。こ  
うした状況  
にあつて、  
キリスト教  
は教会の  
存続にとつ  
て不可欠の  
ものとなつ  
た。どの主  
要ミッショ  
ン・グルー

プも伝道開始からその必要性を認識し、初期の段階から男子及び女子のためのキリスト教主義学校を一つないしはそれ以上設立している。これららの学校の歴史は、多くの苦闘を明らかにしているであろう。非常に深い落胆に陥り、ほとんど完全に将来への展望を失うような時もあつ

た。しかし、今日キリスト教主義学校には勝利が目前に置かれている。ただ必要なことはその勝利のために、あらゆるクリスチヤンの努力が必要なこと、奉仕のための絶好の機会が与えられていることを確信できる現在の状況を研究することだけである。

キリスト教主義学校は全ての教会の有能な牧師や伝道師を実際養成して来たし、今日でも養成し続けている。

またキリスト教主義学校は教会の最も卓越した信徒の大部分を養育して來たし、今日でもそうである。

さらにキリスト教主義学校は、キリスト教に対する一般的な偏見を打ち砕き、キリスト教の環境の中で訓練された男女を社会の各階層に送り込むことによって、最も力強い機関となっている。

今日、これらの学校の状況は最も推奨すべき状態にある。学校の最善の状態は、その機能を十分に發揮することであり、既存の建物に新しい建物を増築するための膨大な資金を用立てることで促進することである。現在の成功をもたらした理由は次のようなことがあると言えるかもしれない。第一に、政府がこれらの学校のい

くつかを公的な信頼に値するものとして認定したことである。第二に、かなりの公立学校が不十分であることである。全ての公立学校が定員を満たしており、少なくとも上級学年（グレード）における応募者の三分の一が入学できない状況である。第三に、クリスチヤン及びノン・クリスチヤンの両親の一部には一様に、子供を健全な道徳教育を受けられる所へ行かせたいという願望が増えていることである。第四に、他のどの学校よりも優れていることである。英語は日本で最も人気のある外国語であり、英語の習得はそれを目ざす人々の熱望の的となっている。それで英語の特別教育を望む人の多くが、ミッション・スクールへの入学を目指す事態となっている。

そうしたことが、一致シノッドがキリスト教主義学校を創設しようとする際、直面する必要条件である。他の学校が過去に行なつてきたこと、我々が将来設ける学校に期待することを踏まえれば、我々は十分な設備と有効な教育態勢を整備していくことができる。我々の学校は将来の福音伝道の取り組みの基盤を提供している。我々は牧師と伝道者を養成せねばなら



熊本教会の郊外日曜学校

後列：江副翼(注2)（五高花陵会第八回生・ブラウンから受洗）

その左：ブラウン夫人

ず、学校が彼らを教育することを期待している。我々には教育を受けた信徒が必要であり、学校が信徒を養育するであろう。

学校が組織化され整備された後、少なくとも八人の日本人と一人のアメリカ人の教授陣を編成すべきである。この陣容は二〇〇人の生徒に相応しいはずである。教授の給与は援助金の

一部を支給する責任があり、さらにミッショナリーボードはそれに加えて毎年二、〇〇〇ドルを支出することになるはずである。この学校のグレードは、アメリカの大学の三年次に生徒を送り込むのに十分な高いレベルをもつものとなるべきである。後にも一年あるいは二年コースを引き上げるべきである」。

ブラウンは将来の福音伝道の基礎を提供するミッション・スクールの使命として、健全な宗教教育（キリスト教教育）と英語教育を特に掲げ、牧師と伝道者を養成し、有能なキリスト教信徒を養育することを挙げている。ミッショナリーボードの支援の下に、ハイレベルの二〇〇人規模の学校を構想していたようである。

ブラウンが『Japan for Christ』を出版した同月の一月二二日、熊本市外大江に学校敷地を購入し、ブラウンは念願のルーテル教会ミッショナリ・スクールを創設する土地を手にした。

九州学院が開校して三年後の一九一四（大正三）年四月一五日に発行された『日本福音ルーテル教会創設二十年記念史』に、ブラウンは「九州学院略史」を執筆している。英文で書いたものを訳したものであろう。創立後三年で入学者三四〇名を数え、成功と名声を得てているのは、「主として院長遠山参

良氏の手腕と経験、並びに職員諸氏の教育家として位置高く、経験と学識とに富めることに帰する（二〇〇頁）としたうえで、九州学院を創設した主要な目的を次のように記している。

第一に、「あまねく各地に赴き、イエスキリストの純福音を教ふる基督教々役者（注・牧師）を得、また之を教育する道を開かんが為」とし、もしこの大目的を達成することができなければ、設立の主要目的の働きを果たすことに失敗したことになる、と強調している。さらに第二に、「基督教主義によりて教育されたる基督教平信徒を出し、以て最も高尚なる市民を作るの道を開かんが為」、第三に、「以上二個の目的を達成して、我がルーテル教会の真の右手となり、日本全国に福音を伝ふるに、偉大なる助を得んが為」とし、九州学院が教会のために設立された以上は、教会として学校のため尽力すべきであると記している。

ブラウンが構想した九州学院は、「しかるべき教養を身につけた牧師を養成する神学部とそれに併設する中学校のキリスト教主義学校」（德善義和編著『日本福音ルーテル教会百年史』、二〇〇四年一月一〇日）であり、そこで「日本人信徒の精神的価値観を発展的にキリスト教的に刷新し、教会における指導的信徒を養育していくことを目的とした」（同前）もの

であつた。こうしたビジョンのもと、ブラウンは遠山参良と共に九州学院設立プロジェクトの実現に向け奔走したのであつた。

## 二 ルーテル教会最初の教育機関 ・私立熊本高等予備学校

一九〇八（明治四一）年九月、日本福音ルーテル教会独自の最初の教育事業が具体化する。「私立熊本高等予備学校」の創設である。

ブラウンは、前年一九〇七年一一月に日本に戻る予定であったが、自らの病気と夫人の病気により、そのままバージニア州サーレムに留まり、熊本に帰任するのは翌年一〇月になつた。一九〇七年五月一六日にはミッショントーナメントの会議で、ミッショントースクールの創設と組織作りに本格的に取り組むこと、全ての権限をブラウンに委嘱することが決議されていた。

ブラウン帰任前の熊本では、本格的なミッショントースクール創設へ向けた取り組みが始まつた。学校と教授陣の陣容が固まつたのであろう、熊本教会初代牧師・山内直丸とスタイルト宣教師を中心となつて開校の準備が進められた。教授陣については、様々な局面で親密な関係を築いていた五高教授・遠山参

良の受諾及び周旋に依つてゐることは明白である。

明治四一年八月一日発行の『路帖新報』<sup>ルウチヘル</sup>二六号紙

上に、「私立熊本高等予備学校創立予告」の特別広告が出された。その趣旨は「本校は中学校、若しくは中学校と同等以上と認められたる学校を卒業したる後、更に進みて高等の学校に入学せんとする者に予備教育を施す目的を以つて、既に設立を出願せり。不日認可せらるゝならん。入学志望の方はこの際申込まるべし。認可済次第規則書を送るべし」とある。この趣旨によると、創設予定のミッショニ・スクール（中学校）から、例えば第五高等学校や熊本工業高等学校などに入学しようとする者を教育する学校として構想されていたと考えられる。奇しくも翌年一月二二日、熊本高等予備学校が設立された場所（大江村向榮社跡）に隣接した土地（大江村字本）が、九州学院敷地として購入されたのである。責任者は「熊本市水道町十八番地山内直丸方、私立熊本高等予備学校創立事務所」と記されている。当時、日本福音ルーテル教会の中心となっていた熊本教会が、ルーテル教会最初の教育事業を興す創立事務所となつていたのである。そして、その任を負つたのが、山内直丸牧師であった。

『熊本縣教育史』下巻（熊本縣教育會昭和六年一月一〇日）の「第六期新設私學表」によれば、「私

立熊本高等豫備學校」の所在地は「飽託郡大江村大江四七七」、「設立者又ハ校主校長」は「アーサー、ゼー、スタイルワルト」、「教養ノ主ナル教科」は「卒程度ノ者ニ高級學校入学準備」、設置年月は「明治四十一年八月十二日」と記されている。所在地の番地は、九州学院の所在番地と同じである。

八月一二日に設立認可を得た熊本高等予備学校は、スタイワルトが校長となり、山内直丸が幹事として事務を担当し、「全二十時間の授業で、入学料二円、授業料毎月二円の規定で、九月十五日を以つて開校始業した」。開校式は九月一五日午後一時より執り行なわれ、熊本高等工業學校長・中原淳蔵工學博士とミラー宣教師が臨席し、校長・スタイル



Rev. Yamanouchi Naomaru and Family

山内直丸牧師と家族

## Our New Missionary



REV. ARTHUR J. STIREWALT.

スタイルト宣教師

業教授)

国語

(二時間)

本田弘

(五高教授)

漢文

(二時間)

兒島獻吉郎

(五高教授)

数学代数

(二時間)

杉山岩三郎

(五高教授)

数学幾何学

(二時間)

早川金之助

(五高教授)

修身

(二時間)

山内直丸牧師

ト、講師・杉山岩三郎（五高教授）、兒島獻吉郎（五高教授）、遠山參良（五高教授）、高橋正熊（高工教授）の訓示があつた。中原校長は遠山參良の熊本洋学校での先輩（一期生）であり同志であつた。二カ月前まで熊本高等工業学校で講師をしていたミラー宣教師は博多教会から駆けつけたのである。「入学生は五十九名、出席学生は五十六名、それを甲乙二組に分けて十六日から授業が始まった」。授業は、毎日午後一時から四時間ずつ行なわれた。教科目と担当教師は次の通りである。授業時間は二組に分けて授業を行なつたので、それぞれ倍の時数を担当したことになる。

英語会話・書取（二時間）スタイルト宣教師  
英語訳解（三時間）遠山參良（五高教授）  
英語文法・作文（三時間）高橋正熊（熊本高等工

この陣容を見ると、六人の講師のうち五人までが第五高等学校の教授である。いずれも遠山參良の周旋によるものであろう。これだけの充実した陣容を誇っていただけに学生は増加の一途を辿り、翌明治四二年四月の新学期には九五名の新入学生を迎えて、計一三〇名の盛況となっていた。ところが、熊本高等予備学校は、六月二六日、突然閉鎖される。福山猛編纂『日本福音ルーテル教会史』には、「その年の学校長会議の席上でなされた文部大臣の訓辞演説の精神に随つて、六月二十六日を以つて遂に閉鎖を断行した」と記されているだけである。これは、一八九九（明治三二）年に発令された「文部省訓令第十二号」の「法令の規定ある学校に於ては課程外たりとも宗教上の教育を施し又は宗教上の儀式を行うことを許さざるべし」という宗教教育を禁止することの訓辭演説ではなかつたかと推察される。キリスト教の礼拝が行なわれていたとは考えられないし、スタイルトが担当していたのは英語会話と書取の

授業である。唯一、山内直丸が担当していた修身がキリスト教道徳だつたかも知れない。後は官立の高等学校の教授の授業である。課程外で聖書を使った伝道が行なわれていたかも知れないが、不明である。

熊本高等予備学校のこの不自然な突然の閉鎖の理由について新事実が判明した。それはスタイルルト校長の日記にある注目すべき記述である。ルーテル学院大学キリスト教学科のティモシー・マッケンジー (Rev. Timothy McKenzie, Ph.D.) 准教授の論考 (『ルーテル学院研究紀要』No.43,2009.) によると、ルーテル教会が経営する予備学校で教えてている第五高等学校と熊本高等工業学校からの講師を、文部大臣が賛成 (承認) しなかつたことに起因しているといふことである。スタイルルトが一九〇九年四月二一日 (閉鎖される二ヵ月前) に書いた日記 (マッケンジー氏所有) に、「文部省の現在の会議で、高等学校の教授を外部の学校で教えさせることを継続するかどうかが明らかになるのを、我々は心配して待つてゐる。もし継続されなかつたら、我々の予備校は失敗するかもしれない」とある。この日記を引用してマッケンジー氏は、高等学校の教授を講師として使うことは、入学試験のような事柄と利害関係があり矛盾が生じることを示唆しているという。文部大臣がこうしたタイプのケースですべき決定を、学

校と伝道局が注視していたことを、スタイルルトの日記は物語つてゐると指摘している。

この事実を踏まえると、官立の高等学校の教授がそこに入学するための私立の予備校で教えることを、当然のことながら文部大臣が認めなかつたことが、突然の閉鎖の要因であつたことは明白である。高等学校の授業が空いている午後分担して教えたのであろうが、それぞれ官立の高等学校の正規の教授である。熊本高等工業学校長・中原淳蔵が開校式に臨席していいたのを見ると、各校長の内諾は得ていたのであろうが、所轄の文部省が許さなかつたのである。その際、キリスト教のミッショングが経営する私立学校で、官立学校の教授が教えることについても難色が示されたのかもしれない。こうしたことが要因となつて、熊本高等予備学校は閉鎖の止むなきに至つたのである。

### 三 ブラウンの帰任と神学校開校準備

一九〇六 (明治三九) 年五月、ブラウンは帰米するため熊本を発ち、翌年には休暇を終え日本に戻る予定であったが、帰米後の多忙から病気になり、さらに夫人の病氣も重なつて、そのままサーレムに留まつっていた。一九〇八 (明治四二) 年二月二三日、

ブラウンの家庭に三人目の男子が生まれるが、生後まもなく天に召された。その後、健康が回復し、同年九月五日、ブラウン一家はサーレムを離れ、日本へ旅立つた。

『TIDINGS』一九〇八年九月号「Off for Japan」によると、ブラウン一家はスマミス宣教師(Rev. Frisby Smith)を伴つて、九月一五日、サンフランシスコから汽船モンゴリア号で日本へ向け出航した。同誌の同年一一月号「Our Japan Corner.」には、ブラウン一行が無事航海を終え、一〇月七日には、長崎に到着したことが、モンゴリア号の写真入りで紹介されている。ブラウン一行は長崎から佐賀を経て、一〇月一一日夕方、熊本に帰任した。

ブラウンが熊本に帰任すると、スタイルワルトと山内直丸の手によって熊本高等予備学校が開校され、活況を呈していた。第五高等学校や熊本高等工業学校から的一流教授陣を配し、ルーテル教会最初の教育事業は順調に進んでいた。しかしそれは、ルーテル教会としての神学教育やミッショニ・スクールとしてのキリスト教主義教育を担うものではなかった。ブラウンは、ルーテル教会が本来取り組むべき教育事業の創設に着手する。その第一が路帖(ルウテル)神学校の創立であつた。

神学校を開校するにあたり、神学生を募集しなければならない。明治四一年一二月にはリック・パードとブラウンが博多に出て、まず会員の入江徳太郎を神学生として試験した。翌



OFF FOR JAPAN  
ブラウン一家の再来日記事 (『TIDINGS』より)

#### Off for Japan.

Rev. and Mrs. C. L. Brown, with their two sons, and Rev. Frisby Smith, will sail for Japan on the steamship "Mongolia," which leaves San Francisco on September 15th. One of the last things they did in getting ready to sail was to say good-bye to TIDINGS.

We want to follow them in their journey. All the boys and girls ought to get their maps and trace the way from San Francisco to Japan. More than this, we want to follow them with our prayers, day by day, as they are on the ocean and after they reach Japan. We need to follow them, also, with our gifts. The following, in this respect, is not as large as it should be. Let us in all three of these ways follow Dr. and Mrs. Brown and Mr. Smith to Japan.

#### Christmas Presents for Japan.

明治四二年二月二一日には高橋信太郎が熊本教会に転入会し、同教会出身の神学候補者となつた。この二人に久留米教会の松本学明を加え、最初の三名の神学生候補者が揃つた。

熊本高等予備学校の運営を行ないながら、ブラウンと共に神学校設立の準備を進めていた熊本教会の山内直丸牧師が、神学校開校七カ月前の一九〇九(明治四二)年二月、バージニア州ウインチエスターの

ればならぬ。明治四一年一二月にはリック・パードとブラウンが博多に出て、まず会員の入江徳太郎を神学生として試験した。翌



明治42年頃の日本福音ルーテル熊本教会員  
(熊本教会講義所で)

2列目中央右側：ブラウン宣教師

左側：スタイルルト宣教師

3列目左端：山内直丸牧師

グレイス教会・教会学校に、熊本教会の現況と神学校開校について次のように書き送っている。

「熊本教会は、自給に向けての準備を進めていいる。具体的には、一九〇五年二月から昨年のクリスマスまでの日曜日の礼拝献金を積み立ててきている。その献金は七五円に達している。

これは自給への準備金であつたが、神学校が開

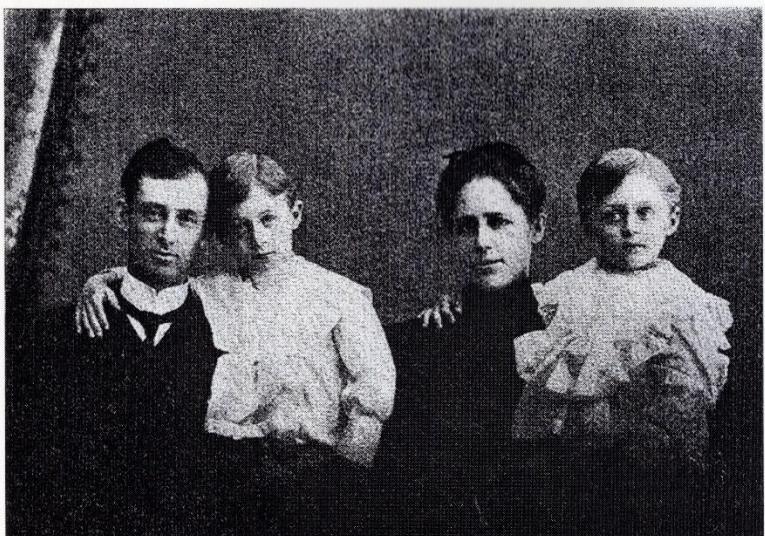
設されるので、この献金で日本語及び中国語の書籍を購入し、神学校に寄付したい。すでに、そのために二五円五〇銭が使われた。神学校開校は、今年の九月を予定している。私は『キリストの生涯』、『教会史』、『キリスト教倫理』を担当することになる。適切に教える自信はないが、他に代わりの人がいないので、しばらくは責任を果たさなければならない。けれども、私自身、神学校教授職という重責を担うほどの強さを持ち合わせていない」(『Lutheran Church Visitor』1909.4.29・青田勇訳)。

神学校開校へ向け、熊本教会も具体的な支援態勢を整えつつあつた。熊本教会の牧会と同時に神学校開校の準備のため、山内直丸牧師も多忙を極めていた。

#### 四 路帖神学校の開校

順調に学校運営が行なわれていると思われた熊本高等予備学校が、明治四二年六月二六日、突然閉鎖された。軌道に乗っていた最初の教育事業の挫折に關係者の落胆はかなりあつたと思うが、思いは既に路帖神学校へと向かっていた。

一九〇九（明治四二）年九月、ブラウンは南部一致シノッドの機關紙『Lutheran Church Visitor』



## OUR MISSIONARIES AT KUMAMOTO, JAPAN.

Rev. and Mrs. G. L. Brown and their sons, Charles Alfred and Robert Marshall Brown.

ブラウン宣教師と家族

従の職務について一年が経過した。学院設置の目的は神学部門を設けることにあら。だが、神学部門開設は春まで待てないので、今月の二五日

に次のような文書を書き送っている。ミッショントスクール（九州学院）の開校が遅れたことで、神学部門の開設にも懸念が出てきて、苦慮していた様子が窺える。

「シノツドが日本での学校をミッショントスクールと名付けて三年、さらにこの事業の基金を募つてから二年、私C・L・ブラウンが学校建築に専



## Mission Home at Kumamoto

### 新屋敷 338 番地の宣教師館（ブラウン宅）

に神学校を別に開校する。生徒は三名である。  
その内の二名は、南部一致シノツドのミッショ  
ンから、もう一人はデンマーク・ミッショんか  
らの生徒である」(E.V.1909.10.7・青田勇訳)。  
南部一致シノツドのミッショんからの二名は入江  
徳太郎と高橋信太郎、デンマーク・ミッショんから  
の一人は松本学明を指している。

いよいよ待望の路帖神学校が開校する。「熊本市古新屋敷町四一二番地」のスティワルト邸を仮校舎として開校式が挙行された。白川を挟んだ路帖熊本教会のほぼ対岸に位置する場所であつ

た。

『熊本縣教育史』下巻（同前）によると、「設立者又ハ校主校長」は「チャーレス、エル、ブラウン」、「教養ノ主ナル教科」には「神学ヲ授ケ基督教ノ牧師ヲ養成ス」とある。「備考」には「中学校卒業程度ノ学力アルモノニツキ予科二年本科三年ノ教育ヲナス」と記されている。

開校式はブラウン校長による「テモテへの手紙

二」第二章の朗読、秋元茂雄教授（日本基督教会牧師、紫苑会発起人）の祈祷で始められた。続いてブラウン校長の式辞及び訓戒、山内直丸牧師（ルーテル熊本教会）、ワインテル（久留米教会）、秋元茂雄教授の訓話があり、ワインテルの祝祷で終つた。

路帖神学校への最初の入学生は、松本学明（久留米教会）、入江（川瀬）徳太郎（博多教会）、高橋信太郎（熊本教会）に草野又五郎（熊本教会）を加え、四名となつた。

## 五 九州学院のルーツ・路帖神学校

開校時の学科目（時数）と教授陣は次の通りである。

旧約歴史（二時間）・旧約聖書釈義（二時間）・聖書地理（一時間）・ワインテル（デンマーク・ルート

ル教会宣教師、久留米教会）

新約聖書釈義（二時間）・教理（二時間）・ブラウン（校長・南部一致ルーテル教会宣教師、熊本教会）

新約歴史（三時間）・教会歴史（二時間）・倫理学（二時間）・山内直丸（日本福音ルーテル熊本教会牧師）説教学（一時間）・秋元茂雄（日本基督教会牧師）英語（三時間）・スタイル（南部一致ルーテル教会宣教師）

音楽（一時間）・高橋長七郎（ギリシャ正教会）

このような神学教育をもつて明治四二年九月、スタイル（新屋敷町四一二番地）を仮校舎として路帖神学校は始まつたが、翌四三年末には次のように八名にまで神学生が増えた。

本科二年級学生 松本学明（久留米教会）、入江徳太郎（博多教会）、高橋信太郎（熊本教会）  
予科生（四月入学） 三浦家（久留米教会）、亀山万里（久留米教会）

予科生（九月入学） 本田傳喜（熊本教会）  
予科生（一二月入学） 今井良雄（久留米教会）、渡辺潔（熊本教会）

この年の一月一九日に九州学院が設立認可され、スタイルは九州学院の要務を帶びて、四月二六日、長崎から歐州を経て帰米した。そのため路帖神学校は、仮校舎を新屋敷町四一二番地から傘三番丁

(現・新屋敷二丁目)に移し、その後さらに西子飼町(現・東子飼町)に移つて九州学院の開校を待つた。

教授陣の方は、山内直丸牧師が同年七月、疲労のため博多東公園に移り静養に努めたため、その不足分をワインテルが久留米から熊本に移住して補い、秋元茂雄も担当を増やした。また、同年九月三〇日、第五高等学校を依願免本官となり、九州学院創立に従事していた遠山参良が神学校の講義も担当することとなつた。明治四三年九月以降の学科目と教授陣は次のとおりである。



路帖神学校跡記念碑  
(スタイルルト宣教師宅跡 現・新屋敷1丁目)

〔本科〕

礼拝学・教理問答・教義学・ロマ書  
講解・ブラウン、教会史・旧約史・イザヤ書講解・聖書総論・ワインテル、  
説教学・ヨハネ書講解・パウロ伝・秋元茂雄、弁護論・基督教倫理・遠山参良、音楽(予科と共同)・高橋長七郎、バイブル・バイオグラフィー・ブラウン、ブルース著『アポロゼチックス』・ブラウン、ルターの諸著書の講義・ワインテル

〔予科〕

心理学・論理学・奥太一郎(五高教授)、英語・歴史・村上二郎、聖書地理・ワインテル、英語・ブラウン、その他に聖書漢文、数学などが課せられた。

ルーテル教会の伝道と教育事業の拠点となってきた熊本教会では、その要となつて働いていた山内直丸牧師が健康を害し、七月に熊本教会を辞任して博多に移住したため、鷺山誠晴が一〇月に主任として迎えられ、伝道の任に当つた。また、山内牧師の後任として翌明治四四年七月、瀧本幸吉郎が家族と共に熊本教会に着任した。瀧本は鷺山伝道師と力を併せ伝道布教に尽力すると同時に、山内の後を継いで



THEOLOGICAL STUDENTS 1912—Beginning at top and going from left to right their names are: Messrs.

Watanaba, Kamiyama, Miura, Moto, Ishimatsu, Kawase, Honda.  
後列左より：渡辺潔（熊本教会）、亀山萬里（久留米教会）、三浦豕（久留米教会）、武藤醇（久留米教会）

前列左より順次：石松量蔵（全盲・佐賀教会）、川瀬徳太郎（博多教会）、本田傳喜（熊本教会）

九州学院神学部の教授も兼任した。

路帖神学校は、一九一一年四月十五日の中州学院開校から二ヶ月後の六月に中州学院内に移転し、中州学院神学部となる。路帖神学校が創設されたスタイルルト宣教師宅（新屋敷町四一二番地、現・新屋敷一丁目八）跡には、神学校跡記念碑（小石碑）が建てられている。その記念碑には、「一九〇九年 中州学院発祥之地 ルーテル神学校跡」と記されている。ルーテル教会の教育事業の観点から見れば、路帖神学校の創設こそが中州学院のルーツだつ

たといふのである。

(ふじもと あいと／中州学院 100周年記念歴史資料・情報センター長)

(注1)『TIDINGS』(The Sunday School and Missionary Journal of the United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South. April 1905 ~ June 1919.) 南部一致シノックの月刊誌で、田曜学校と宣教活動の会報。一八九七年から発刊されていた『南部ルーテル』を、一九〇五年から『タイディングス』(便り、報知)と改称して、一九一九年まで刊行された。

(注2)江副翼<sup>えぞえたつみ</sup>・江副翼は明治三八年七月、五高卒業後、東京法科大学に入学。明治四二年、東京帝大法学部政治学科を卒業し、日本帝国海軍少佐（ロンドン大使館付武官補佐官）として一九二一年（大正一〇）年一一月、日本政府からロンドンへ派遣。江副はアメリカ経由でロンドンに向かうが、その途上の一二月五日、ブラウンが西アフリカのリベリアで召天。翌年一月二十五日にブラウン未亡人を訪ね再会。アメリカで行なわれた葬儀で江副は「弔辞 東京のブラウン先生の教え子・一改宗者から」(TRIBUTE FROM TOKYO BY ONE OF HIS PUPILS AND CONVERTS) を読み、同年発行された『In Memoriam Charles Lafayette Brown』(『追悼 チャールズ・ラファエト・ブラウン』) アメリカ一致ルーテル教会海外伝道局事務所発行、一九二二年)に収録された。